

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	群馬大学	整理番号	F02
プログラム名称	重粒子線医工学グローバルリーダー養成プログラム		
プログラム責任者	峯岸 敬	プログラム コーディネーター	中野 隆史
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6月に現地視察を実施した際は、厚生労働省の要請を受け、がんの重粒子線治療を中心とする先進医療の新規患者受け入れが停止されていたが、7月より新規患者の受け入れが再開された。 ・ 米国テキサス大学ウェスタン校等と参加する、NCI (National Cancer Institute) によるプロジェクトにて行われる国際共同臨床試験において、膵臓がんに対する重粒子線治療の RCT (ランダム化比較試験) が組み入れられることは評価できる。ただし、膵臓がんは正確な結果が出るのか不安なところもあるため、膵臓がん以外のがんでも RCT を実施することが望まれる。 ・ 臨床試験の際は統計学の専門家にも関わっていただくことが望ましいが、この点については、現在、保健学科の生物統計専門の教員が臨床試験のプロジェクトに参加いただくことで対応がなされている。しかし、長期的な観点からは、きちんとプログラム担当者としてプログラムに参画していただくことが望ましい。 ・ 重粒子線医学研究センター内だけでなく、理工学府がある桐生キャンパス内にもプログラムの研究スペースを確保するなど、医工連携が徐々に推進し始めている。 ・ ICRR (International Congress of Radiation Research : 国際放射線研究会議) で、本プログラムがジョイントミーティングしたことは、学生にとっても良い経験になったようである。今後も積極的にこのような機会を作ってほしい。 ・ PO フォローアップ報告書でも指摘されていた HP については、きちんと改善がなされている。 <p>2. 意見 (改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医工連携は徐々に進んではいるが、未だ医工の連携をどこに求めるのかということ (医工連携の像) があまり明確ではないため、できるだけ早く明確化することが望まれるとともに、医工連携における将来イメージ、そのために今どのようなステップを踏んでいるのかというシナリオも描いていただきたい。 ・ リーディングプログラムはリーダーシップを持った学生をグローバルに育てるのが一番の目標であるが、学生はその点についてあまり意識していないようだった。リーダーシップをどのように育てるかという意識が、学生、教員ともに不足しているようなので、今後はそういった観点でプログラムを進めていただきたい。 ・ 留学生は日本語を学ぶ機会がほとんどなく、同じように日本人の学生も英語を学ぶ機会が少ないようなので、この点について配慮していただきたい。 ・ 留学生は、カリキュラムを見ても日本語で記載してあるため理解できないようである。例えばシラバスに番号を振るなど、事務方も含めできる限り配慮していただきたい。 ・ 学生は、プログラムの中で自分のキャリアパスにフィットするものを学べて満足し 			

ているようだったが、学んだことをキャリアパスにどのように生かすかというところがないように感じた。学生個人がこのプログラムで学んだことをどのように社会還元していくのか、その実現に向けて今なすべきことについて、いくつかの選択肢や機会を与え、自発的に考える動機付けが必要ではないか。学生個々の志望動機、バックグラウンドや事情も異なるのでメンターが個人の成長を見守り、誘導し、各自がキャリアパス像を明確に持って実現するようなきめ細やかな対応が重要である。

- 研究と医療とでは異なる点がある。例えば、研究を医療に利用するときには、法的規制などの問題が生じてくるため、これらについて、専門家に全て任せるのではなく、研究者がそういうことを勉強するのも重要である。留学生にどの程度有用かというところはあるが、少なくとも日本人については学んでもらうのも有用なのではないか。